

台湾における「中国意識」と「台湾意識」

——最近の文学・思想界での論争を中心に——

(東京大学文学部助手) 陳 正醒

1. はじめに
2. 「台湾文学」をめぐる論争
3. 「中国結」「台湾結」の論争
4. むすび

1. はじめに

現在の台湾では、台湾が中国の一部であるという「国際的」了解にもかかわらず、住民の意識において「中国」と「台湾」をめぐる多様な民族意識が存在し、混沌とした状況にある⁽¹⁾。これは、戦前の日本による植民地化と、戦後の分裂国家の形成とによって、近代的な国民統合過程において中国大陆とは異なる「境界的」な地位に置かれた台湾の歴史的経験からして、当然の現象である。そして、今日、「台湾の前途」にまだ明確かつ安定的な展望が現れない現状で、異なる民族意識の間の対立が生じることは、避けられない。

近年の民主化運動の進展と言論規制の相対的緩和に伴って、顕著となってきた一つの傾向は、国民党の公式的イデオロギーの下で抑えられてきた「台湾意識」が、「党外」民主運動の中で、次第にその政治化された形態で表出されてきていることである。そのことは、台湾の前途に対する「台湾1800万住民」による共同決定の要求や、「新しい独立した国家」への体制変更の主張、さらには「自決」のスローガンの登場など、象徴性を持った表現からも看取できよう。また、公用語化を含め、「台湾語」（閩南語系の台湾方言）の使用機会の拡大を要求する動きもある。さらに、台湾の前途に対する特定の見解と密接に連動して、「台

湾・台湾人300年（または400年）の歴史」といった言葉に示されるような歴史意識も広がっている。

このような傾向が強まる中で、「党外」陣営および、思想界における国民党に対する反対派の内部において、政治面・文化面を問わず、「中国意識」と「台湾意識」とをめぐる意見対立も表面化してきている。この内部分岐の状況を強く反映しているものの一つが、文学界における論争である。台湾の一部の文学者の間では、80年代にはいつから、台湾文学の定義や発展の方向、その中国文学との関係などについての論議が、継続的に起っている。これらの文学論争で主張される見解からは、文学者が抱く多様な民族意識とその理念を見出すことができる。さらに、1983年夏、「党外」の政論雑誌を舞台に、より直接的に民族意識を扱った論争が発生した。「中国結」と「台湾結」（それぞれ、中国と台湾とを志向する民族感情上の「固定観念」）とに関する論争である。そこで論じられた問題の一部は、「民主化」の目標と方法をめぐる論議などの形で、それ以前にも論じられてきたものと言えようが、これらの諸問題の民族意識に関わる側面が焦点となった点で、注目に値するものであった。

そこで、本稿では、この80年代における台湾文学に関する論議と、「中国結」「台湾結」の論争とを取りあげ、これらを通して、台湾における「中国意識」と「台湾意識」との対立の様相を考えてみたい。

ところで、台湾における「中国意識」と「台湾意識」との問題は、台湾社会内部における本省人（台湾人）—外省人（大陸人）関係に関わるもの

と、台湾と中国大陸との関係に関わるものとの二重の構造を持っている。

まず、後者についてみると、中国大陸との関連において、最近の「台湾意識」は、1970年代初期の外交危機から79年の米中国交に至るまでの国際情勢の展開と中国政府による「統一攻勢」とに対する危機感、不安感によって支えられている。台湾においては、中国大陸は、文革期に代表される政治的・社会的動乱の頻発する、生活水準や生活様式、文化的・政治的価値感において台湾とはかなり隔たった社会だ、というのが支配的認識であって、台湾社会の現状をラディカルに否定するのではない限り、現段階での中国大陸主導の「統一」は、事実上の「併呑」であり、恐怖感をあおるものと受け取られているからである。政治的な反対派である「党外」の場合も、中産階級を主力にするというその社会的基盤から言っても、また、民主化への不徹底ではあるが着実な歩みを破壊されたくないという願望から言っても、その観念に大差はない。

一方、このような状況下において、国民党政権自身による「台湾化」や政治的「近代化」に満足しない「党外」の民主運動は、「中央民意代表」の全面改選、「中華民國憲法」を棚上げにして戒嚴令の解除を目ざす「国家基本法」の制定などを、政治的目標として設定している。これらは、台湾社会の上に立つ政治機構に、台湾社会を代表する性格を付与することを目ざすものであるが、同時に、この代表性を犠牲にしてきた、国民党が維持する「全中国の代表政府」としての「法統」の放棄をも要求する。

「法統」の放棄の要求は、さらに、本省人の政治的権利の伸張と関連づけて捉えられもする。台湾社会内部における本省人－外省人間の亀裂は、2・28事件に象徴されるような、1945年以後の数年間の、両集団の出会いの時期における摩擦に由来している。その後、両者の集団的差異を保持す

る要因もいくつか残されているが、全体的傾向として台湾社会は、経済発展に伴う両集団それぞれの内部での社会的差異の拡大によって、社会経済階級上の分化が＜民族＞上の区分線と交差する型の社会に移行してきている。⁽²⁾意識の面でも、省籍に関する固定観念は根強いものの、「省籍矛盾」を絶対視する考えは、若い世代を中心に薄れている傾向にあると思われる。若い世代においては、同一の教育経験から両者の文化的共通項が旧世代よりも多くなっているからである。それにもかかわらず、「党外」運動においては、外省人に対する配慮も意識されているものの、なお、本省人の持つ歴史的な、自分達の意志の十分な発現が「外来者」によって妨げられているという土着者感情に訴えることによって、勢力を拡大しようという傾向が見られる。こうした感情の掘り起しは、1979年12月の高雄事件、翌年2月28日に発生した林義雄省議員家族殺傷事件などの、民主化運動に対する圧力によって、かえって強められていると思われる。加えて、中国政府の「統一攻勢」も、対中国大陸意識としての「台湾防衛」意識と同時に、「新たな外来者」への恐怖がいわば「土着者の歴史上の悲運」の思い⁽³⁾を呼び起し、本省人意識としての「台湾意識」にも作用しているのである。

本稿で扱う論争の中でも、とくに「台湾意識」の内容に、このような二重性を見出すことができる。また、これとは別に、このような「台湾意識」を抱きながら、さらに根本的な「中国人意識」をも失わない複雑な＜民族＞意識の例を見出すこともできるのである。

本稿では、国民党系列の諸集団、諸個人の公式・非公式の考え方、「政治」に関わらない文学者や知識人、および一般民衆の意識などとの対比・関連にまで言及できなかった。したがって、本稿は、台湾における「中国意識」「台湾意識」の全体的様相を明らかにする性格のものではない。だが、

二つの論争の紹介・整理を通して現在進行している状況の一端を示すことによって、文字通り「観念的」に把握されがちな台湾の〈民族〉意識状況の理解の一助になりうるものとする。

2. 「台湾文学」をめぐる論争

最近の台湾文学をめぐる見解の分岐は、1977年から78年にかけての「郷土文学」論戦の時点で、すでに伏在していた。⁽⁴⁾ 様々な形で捉えられていた「郷土文学」の内容と意義に関して、当時進められていた討論と整理の動きは、政府・国民党の文芸政策指導層からの一部の文学者への攻撃のために、中断されざるを得なかった。「郷土文学」に込められる〈民族〉意識とその理念についての論議も、葉石濤が「台湾郷土文学史序説」において台湾「郷土文学」の基礎としての「台湾意識」を論じ、それに対して陳映真が「『郷土文学』の盲点」を書いて、「台湾意識」の背後にある「中国意識」を強調したことによって、問題の存在が示されたが、それ以上の討論は行なわれなかった。⁽⁵⁾

「郷土文学」論戦における「郷土文学」擁護は、王拓や陳映真らを中心に、彼らの見解に沿って進められた。「郷土文学」を社会批判精神を伴ったリアリズム文学へと止揚しようとするこれらの人々の見解は、〈民族〉意識の面でも、「中国」要素と「台湾」要素の重層的把握を基礎に、「郷土文学」を中国民族主義の性格を明確にした民族文学へと止揚しようとする傾向にあった。こうした方向づけに対して、「郷土文学」の伝統を継承してきた人々の一部は、必ずしも賛成していなかったように思われる。それらの文学者の見解は、彭瑞金が「八十年代の台湾写実小説」で示した、リアリズム文学万能の発想に対する批判と、民族主義による視野の拡大という動向のもたらす効果への疑念に、その一端を見出すことができよう。⁽⁶⁾

そして、「郷土文学」論戦の際には論じ尽されなかった「台湾」と「中国」との関係の問題が、

1981年夏の「台湾文学の方向」をめぐる討論で再び取りあげられたのであった。この討論のきっかけとなったのは、この年1月に発表された、詹宏志の一篇文章の冒頭部分に書かれていた悲観的見通しである。詹は、台湾と中国大陆とが、生活・社会制度の相違から、文化的にもはるかに隔たった状況にあることを踏まえ、台湾が将来、中国大陆と統一されて中国の一部になった場合、30年来の台湾における文学活動が、後世の中国文学史において重視されえず、たかだか「辺境文学」として扱われるのだとすれば、現在の台湾の文学者の努力は「むなしい浪費」となるのだろうか、と問いかけた。⁽⁷⁾

このような詹の悲観的な言辞は、大きな反響を呼び起した。とくに、7月号の『台湾文芸』は「台湾文学の方向」の特集を組み、このテーマに関する座談会の記録や、中国文学との関係を含めた、台湾文学の定義、位置、性格、方向を論じた李喬の「『台湾文学』を考える」などの評論を掲載した。⁽⁸⁾

「台湾文学の方向」をめぐる論議を受けて打ち出されたのが、台湾文学の「土着化」の主張である。1982年1月、台湾南部の作家を中心に、文学誌『文学界』が創刊されたが、その第一集において葉石濤が「自主性」に富む文学の発展を唱えたのに続き、第二集では彭瑞金が、「台湾文学は土着化を最重要の課題とすべきである」と題する評論を書いた。⁽⁹⁾ これらの論はおそらく、前年の詹宏志の言を念頭において、将来の評価を憂慮することなく、文学の世界において自立した、将来においても肯定されうる伝統を築き上げるように励むべきだという考えから、論じられたものと思われる。

「自主性」や「土着化」といった、新たなスローガンが出てき始めた1982年3月、台湾文学者の間の「南北分岐」を背景に、「南北作家会談」が開かれた。この会談の詳細と「南北分岐」の実態について知りうる所は少ないが、台湾北部の作家が、第三世界の反帝国主義、反植民地主義、反封建主

義の経験に学ぶことを強調し、南部の作家は、まず台湾文学自体をしっかりと確立し、尊重を受けるようになることが先決である、郷土に根をおろし、目の前の事柄から始めるべきであると主張したと伝えられている⁽¹⁰⁾。ここに示された各々の見解は、後にそれぞれ「第三世界文学論」と「台湾文学土着化論」と呼ばれるようになった主張傾向に対応する。前者の代表人物としては陳映真を挙げることができ、1983年4月に復刊された文学誌『文季』に、この立場の評論が多く見られる。後者の見解は、既述の通り、葉石濤、彭瑞金、李喬ら、『文学界』、『台湾文芸』に拠る多くの文学者によって提唱されている。

第三世界文学と台湾文学、中国文学との関連が本格的に論じられたのは、1984年1月の陳映真の「中国文学と第三世界文学との比較」においてであった⁽¹¹⁾。ただ、それ以前にも、「土着化」の提唱が行なわれていたのとはほぼ時を同じくして、陳らが第三世界や第三世界文学を話題にしてそれらに学ぶ必要性を主張し、また、「分離主義」的な台湾文学論を批判する動きがあった⁽¹²⁾。さらに溯れば、「郷土文学」論戦においても、当初は「第三世界」という言葉は使われていなかったものの、近代台湾文学と、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの近代文学との、反帝国主義・反封建主義という共通性格が語られていた。一方、「郷土文学」論戦の中で起った台湾経済の現状をめぐる論争の中で、胡秋原を始めとする「郷土文学」擁護者は、台湾を含む中国が第三世界と共通の、経済的・技術的独立の課題を抱えていると指摘し、それ以後、『夏潮』を中心に第三世界の状況や第三世界論への関心を訴えていた⁽¹³⁾。文学自体における第三世界文学への注意と研究の提唱は、このような経緯で形成されたのであろう。

「台湾文学土着化論」と「第三世界文学論」とは、その主張の次元が異なっており、それぞれの問題提起からだけでは、両者が絶対的に対立する

ようには見えないが、この二つの主張の裏には、台湾文学の「中国性」と「台湾性」とに対する見解の相違が隠されていた。「中国」と「台湾」との争いという様相は、1983年夏の「中国結」「台湾結」の論争を契機に、一層鮮明になってくる。この論争の中で、政治的な「台湾意識」の提唱者は、「郷土文学」運動や「自主性」「土着化」の論を、「中国意識」と対立する「台湾意識」に基づいた文学論であると説明し、それが、政治・社会運動と連動するイデオロギー闘争の一翼を担っていると主張した⁽¹⁴⁾。文学界においても、1984年1月に、宋冬陽（陳芳明・米国在住）が「現段階の台湾文学土着化の課題」を『台湾文芸』に発表して、陳映真の「第三世界文学論」の背後にある「中華民族主義」を攻撃し、他方、『文季』に掲載された「中国文学と第三世界文学との比較」において、陳映真は、「台湾人意識の文学」論が示す「分離主義」を批判している⁽¹⁵⁾。

「第三世界文学論」と「台湾文学土着化論」との対立の起源は、しばしば、「郷土文学」論戦時の陳映真と葉石濤との見解の相違に求められる。

確かに、葉は「台湾意識」を詳細に論じ、陳は「中国意識」を強調した。その後も、両者はそれぞれ北部と南部の文学界の重鎮と目されている。しかし、二人の＜民族＞意識の差は、台湾文学を論ずる文学者の多様な＜民族＞意識の広がり全体を代表するものではない。そしてまた、「第三世界文学論」と「台湾文学土着化論」という分岐に並行した形で、これらの＜民族＞意識が画然と区分されるわけでもない。

葉石濤は「郷土文学」の特徴として「台湾意識」の存在を指摘するが、それは「中国」と対立する概念ではなく、「台湾に住む中国人の共通経験」と定義されている。葉は、台湾人の心情に関しても、自分たちの世代にも抜き難く植えつけられている共通の意識として、呉濁流の郷土意識と「アジアの孤児」意識に触れるが、呉の場合も大前提

として自分は中国人であると考えているので、台湾独立思想ではないと指摘する。こうした認識に基づいて、葉石濤は、台湾文学が中国人の創造する民族文学であって、根本的な中国民族の伝統文化を放棄することはないと語るのである。

究極的な中国性の承認においては陳映真と同一でありながら、葉の場合、それと並列する形で、台湾文学が中国大陆文学に対して持つ特殊性の側面も強調する。葉が台湾文学の独自性の形成要因として指摘するものは、自然風土、歴史体験などであるが、それと同時に、現在の中国大陆との社会制度、生活方式、思考形態上の相違も強く意識されている。葉はその上で、長期的展望としての中国文学に対する貢献のためには、台湾文学が育んできた独特の性格を発展させて行くべきだと考える。⁽¹⁶⁾

葉石のこの姿勢は、台湾文学に示される中国文学全体との共通性を重視する陳映真の態度と比べた場合、相対的に台湾文学の特殊性に重点を置く形となっている。しかし、この二人の〈民族〉意識は、共に「中国」と「台湾」との二要素の重層性を基礎にしており、これを「中国」か「台湾」かという二者択一の方式で区分しようとするのは、十分な理解の妨げとなるであろう。

一方、「台湾文学土着化論」の全体に含まれる〈民族〉意識の多様性は、必ずしも葉石濤が抱いているような意識によって代表されうとは思われない。「土着化」のスローガンを打ち出した彭瑞金の文章には、葉とはかなり異質の〈民族〉意識のあり方を見出すことができる。彭の論の特徴は、「中国」の要素を積極的に否定しようとするものも含めて、当面の問題に「中国」は無関係であるかのように、もっぱら台湾文学それ自体の問題だけを論じるところにある。彭は「土着化」の基準として、「台湾という地域における人民の生活の歴史と現実を誠実に反映し、この土地に根をおろした」ものであることを挙げる。彭の見解

では、この基準を打ち立てることによって、台湾文学に歴史的淵源と独特の精神的伝統があったことを証明し、自分たちの文学を持っているという「民族的自信」を見出すことができるのである。⁽¹⁷⁾

このようにして彭瑞金は、台湾という地域と人民と歴史との対応での文学上の自己確認を通して、文学上での〈民族〉に触れている。彭が「民族」という言葉で指している対象が「台湾」であることは、疑いをいれない。彭は、この「民族」の、「中国」との関係については全く語らないので、留保の余地はあるが、葉石濤の場合に「民族」が一貫して「中国」を指して使われていることと比較すれば、彭の〈民族〉意識はずっと「台湾」に傾斜していると言えよう。

〈民族〉意識の位相における多様性にもかかわらず、「台湾文学土着化論」には一つの共通した考え方がある。それは、文学者が何よりもまず、自己が生活の中で直接的に関わりあう土地、およびその土地の人民を重視することから出発すべきだ、という点である。

このような考え方を最もよく説明しているのは、李喬の「『台湾文学』を考える」であろう。李は、「台湾意識」を持つというのは、作家が台湾に「属する」こと、即ち、台湾という特定の時間空間の中での大多数の人々の、悲喜、苦楽、愛憎を共に経験し描写することだと述べる。「台湾意識」によって支えられる「台湾文学」は「中国文学」の一部であり、「中国文学」もまた「世界文学」の一部にすぎない。だが、文学者と社会、民衆との関わりにおいては、身近かなものほど深く結びつけられている。したがって、李の考えでは、台湾に生活する作家は、人類のための文学という大志や中国文学建設の抱負を抱く場合でも、まず「台湾文学」において努力すべきであるのだ。⁽¹⁸⁾

李喬の論は、民族主義思想そのものからではなく、文学者の社会との関わり方の側面から組み立てられている。このような見解が含意する〈民

族>意識は、李自身が示唆するように、「中国意識」と抵触するものでもないし、また、「中国意識」の強調を特に重視もしない。

しかし、李の見解は、「中国」と「台湾」との問題において、現実には中立的ではありえない。李喬の立論の前提には、台湾が一つの「単位」となっている現状の肯定ないしは追認がある。それは、必ずしも政治的なく民族>意識に由来する肯定ではないかもしれない。おそらくは、文学活動自体が中国大陆とは切断され、別個の「単位」で営まれてきた状況の事実認識に立脚したものであろう。だが、文学を含めた台湾と大陸との分断状況に対する価値判断と将来に対する展望も、文学者の社会と民衆への関わり方の形態を規定する要素であるとすれば、李喬の見解は、結果的に、中国大陆とは切り離された別個の台湾を志向する立場につながることを意味していよう。李は、「純粹に」文学上の「現象」に着目して台湾文学を語ろうとするのだが、台湾が現実に置かれている「国家」という枠の中にあっては、必然的に政治的なく民族>意識を内包せざるを得ないのである。このことは、逆に、「台湾文学土着化論」と「第三世界文学論」とが、文学論議の形態において、政治的意識の論争の先導役となった一つの理由を示していると思われる。

「第三世界文学論」者が「台湾文学土着化論」者と実際に争っていた問題は、台湾文学をどの程度、そしてどのような形で、中国文学と関連づけて把握するか、ということであった。

彼らは、第三世界への注意と関心を促すことによって、台湾の国際政治・経済上の位置に対する検討の必要性を訴えようとした。彼らの考えでは、台湾は、国民所得や貧富格差などにおいては他の第三世界の国家とは大いに異なるが、資本、技術、市場、文化において先進国の支配を受けている点では全く同じ地位にある。台湾文学が置かれてきた状況、歴史的発展の過程も、第三世界文学との

共通点を持っている。それは、帝国主義、植民地主義に反抗する文化啓蒙運動の一つの環節であったこと、また、第二次世界大戦後においても、「西洋化派」と対決しつつ新たな反帝愛国運動の一翼を担ってきたことである。⁽¹⁹⁾

「第三世界論」者にあっては、台湾が第三世界と共有するところの民族主義思想は、台湾においては明確な中国民族主義として存在すると把握されており、その上で台湾と第三世界との関連を論ずることによって「土着化論」や「台湾意識」文学論が批判される。あるいは、「台湾文学土着化論」の支持者の中に、台湾が第三世界に属することを否定する意見があったかもしれない。⁽²⁰⁾ その場合には、「第三世界」は、中国ないし中国大陆の代替語としての意味を持っていたのであろう。

「第三世界文学論」の中で、台湾における民族主義が中国民族主義であるべきだとされる論理は、戦後の中国大陆と台湾との分断を、かつての植民地化による分割の延長線上に捉えているところから導出されている。陳映真は、日本植民地時代の台湾における「台湾意識」について、その反帝・反封建の民族、社会、政治、文学運動と不可分の、中国を志向する民族主義があったことを指摘すると共に、今日の台湾作家についても、その東西の経済帝国主義と文化帝国主義への抵抗が、中国全体が国家の独立と民族の自由を追求する精神的過程の一環となっていることを主張していた。⁽²¹⁾

しかし、台湾の第三世界との共通性を主張することや、第三世界への関心を抱くことは、必然的に中国民族主義の支持という論理的帰結を生み出すわけではない。そこで、この点を突いて、「土着化論」の支持者からは、第三世界文学への関心と台湾文学の土着化の主張とは対立するのではなく、むしろ同一の努力の内と外への表われである、という見解が出てくる。⁽²²⁾ この考えによれば、「中国意識」に対抗する「台湾意識」もまた、第三世界と共通の民族主義の一つであるというわけであ

る。

これらの人々の「弱小民族」に対する関心や、それと相関する台湾自体についての「被抑圧」の認識が、「第三世界文学論」者の提起した、台湾の自立を妨げる存在としての先進資本主義国との関係の再検討の必要、という水準にまで及んでいるかどうかは、議論の余地があろう。だが、台湾の〈民族〉意識の二重性を前提とすれば、「中国意識」を排斥しない形で、かつ「中国文学」を媒介することなしに、「台湾文学」について「第三世界文学論」と同質の議論を組み立てることも、論理的には可能である。その場合、中国大陆文学は、「台湾文学」にとって他のあらゆる第三世界文学と同じ重みを持つものとして位置づけられることになる。しかも、「土着化論」者の中で多かれ少なかれ「中国意識」を持つ人々が、「台湾文学」自体の「自主性」を当面重視せよと主張する背後には、現状における大陸文学との接触の欠如、現在の中国大陆の社会制度、生活様式、価値観に対する失望や恐怖などが存在している。その意味では、陳映真ら「第三世界文学論」者は、中国大陆の改革および台湾と中国大陆との関係の改善に対する展望を示しつつ、より直接的に、台湾の自主的發展を推し進める精神運動と、中国大陆における同質の運動が、どのようにして、どのような形で中国全体の統合された性格を持ちうるのかを模索する必要に迫られていると言えよう。

3. 「中国結」「台湾結」の論争

「中国結」「台湾結」をめぐる論争は、「党外」の若い世代の見解を代表する雑誌の一つである『前進』に、陳映真による「台湾・台湾人論」批判の文章が掲載されたことから始まった。陳がこの文章を書くきっかけとなったのは、83年6月に起った侯徳健の中国大陆への「帰国留学」事件であった。侯は、中国語フォーク・ソングの作者兼歌手として台湾の青年層に人気があったが、とくに、濃厚

な〈民族〉感情に満ちた「龍をつぐ者たち」（龍的伝人、「龍」は漢〈民族〉のシンボルである）によってよく知られていた。そのため、侯の大陸行は、台湾知識青年層の〈民族〉意識の問題と関連づけて論じられたのである。

「より広い歴史の視野に向かって」と題する文章の中で、陳映真は、侯徳健の歌の流行を一部の人々の主張する「台湾人」民族形成論に対する反証と捉えながら、「台湾・台湾人」主義の批判を進める。陳が「台湾・台湾人」論として取りあげるのは、「台湾が中国本土と隔絶された地理・社会環境の下で、400年の独自の移民・開拓と、資本主義近代化という歴史発展を経て、社会的・精神的に『中国・中国人』と異なる『台湾人』が形成された」という主張と、台湾社会内部の矛盾を「中国人」民族の「台湾人」民族に対する「植民地主義的抑圧と搾取」とみなす主張とである。陳は、これらの主張が台湾の実態にそぐわないと指摘したうえで、台湾分離主義の発生の一因である国共両党の政治に対する台湾人民の不信を踏まえつつ、それらの政治権力に対する支持・服従と異なる中国民族主義を提唱した。それは、長い年月にわたって、多くの人民によって形成されてきた文化的・歴史的中国、そのような中国と中国人の進歩と団結をめざす動きにアイデンティファイすることである、と規定される⁽²³⁾。

陳映真のこの文章は、「台湾意識」の強調に傾いている人々の反発を招いた。翌週の『前進』には、「台湾」の要素を重視する立場から陳映真の主張を批判した蔡義敏の「陳映真の『中国結』試論」が掲載された。この文章からは、蔡が台湾の「独立した」国家形成を支持する見解の持ち主であることが窺えるが、その立論は、「台湾意識」を絶対化してその立場から「中国意識」を排斥する形をとってはいない。

蔡義敏の主張の核心は、陳映真が民族主義感情に対して二重基準を適用しているという点にある。

蔡は次のように論じる。台湾における中国民族主義は国民党の教育の要素があって「自然」の感情とは言い難いが、中国の文化・歴史に寄せる〈民族〉感情自体は非難されるべきものではない。だが、台湾の「かなり自然な」歴史過程の中で生まれてきた台湾を思う感情と理念も、同様に尊重されるべきである。ところが、陳映真是前者（および台湾以外のあらゆる第三世界人民の境遇）には、深い同情を寄せていながら、後者に対してのみ、それを「歴史的に誤った」ものとする、別の基準を当てはめているのだ。

蔡は、陳映真のこの二重基準の背後に、陳が「文化的・歴史的中国」と「台湾・台湾人意識」が敵対し背反する、並存不可能なものとみなす考え方がある、と主張する。蔡自身の見解では、民族意識はもともと歴史的過程の産物である以上、歴史・文化的なものと、「特定の時間空間」の中で発展する「実存的意識と理念」とは両立するはずである。だが、陳映真是、文化的・歴史的な中国が様々な土地で様々な姿で存在しうることを直視していない、これが陳映真の「中国結」とでも言うべき盲点である、と蔡は指摘する。⁽²⁴⁾

蔡義敏の陳映真批判には妥当でない点も多い。例えば、蔡が考える「中国」と両立する台湾の〈民族〉感情と理念が、陳が批判の対象としている「台湾・台湾人」主義と混同されている。また、台湾を思う感情と理念の「自然性」が、陳の批判する「台湾・台湾人」主義に当てはまるかどうかは疑わしい。この点は、陳映真に代わって蔡を批判した江迅の文章でも、2・28事件以後の視野に限定された蔡の誤謬として指摘されている。⁽²⁵⁾

だが、蔡義敏の文章には、いくつか注目すべき点もある。その一つは、文化的〈民族〉と政治的〈民族〉とは、必ずしも一致するものではない、という考え方である。蔡はこのことを、ユダヤ民族とイスラエル、また、パレスチナ人と大アラブ民族主義との関係を例に説明している。この観点

は、それ自体、「統一」か「独立」かについて単一の結論を与えるものではないが、「国家」のあり方をめぐる論議によって〈民族〉意識の存在形態が一面化され、対立が増大する危険を防ぐ、一つの視角となろう。

蔡義敏の主張には、台湾人にとって「中国」は、台湾に具わっている形態で実存しているという意識が示されている。これは、侯徳健事件に対する感想として、中国のあらゆる地域の「中国」としての平等性を訴え、「私の中国は台湾であり、その後大陸の中国を語ることができる」と語る梁景峯や、既に述べた李喬の心情とも共通していよう。⁽²⁶⁾

陳映真の文章をめぐる論議の他に、『前進』では、「中国結」と「台湾結」の問題を扱う意義と討論の姿勢も論じられている。この点に言及したのは、陳元の文章であるが、陳は其中で、まず、「党外」陣営内部における重要な問題は、イデオロギー上の食い違いの暗流の存在であると示唆している。この「イデオロギー」の指す内容が〈民族〉意識を中心としていることは、全体の論旨から明白である。陳は続いて、「党外」が政治運動に集中してきたために、台湾自体の性格に忠実で「党外」の理念に合致した、公正で偽りのない人文知識体系が打ち立てられておらず、この問題を解く思想上、知識上の能力がまだないことを指摘する。そこで、現段階で進められるべき作業は、この問題を、一知半解に獲得された〈民族〉感情や現実的政治利益からではなく、十分な知識を通して自分たちの置かれている状況を理解することによって、解決することである、というのが陳の提言である。⁽²⁷⁾

陳元の見解が『前進』全体の姿勢をどの程度代表しているかはわからないが、「中国派」「台湾派」双方の見解と共にこの種の文章を掲載している点からは、『前進』がこの問題に対して、中立的ないしは調和的立場にあることが窺えよう。『前

進』の発行者である林正杰は、「党外」における「外省籍」青年の代表的存在であるが、「中国は我々の血の源、民族であり、台湾は我々の生まれ育った場所である」として、中国人でもあり、かつ台湾人でもあるというアイデンティティのあり方を訴えている。⁽²⁸⁾

『前進』を舞台にした「中国結」「台湾結」をめぐる論争は、同じく「党外」雑誌である『生根』における、政治意識としての「台湾意識」論の展開を呼び起した。『生根』は、高雄事件で逮捕された『美麗島』の中心人物の家族と、それを支持する若い世代の活動家とが拠っている、「党外急進派」の雑誌であり、その言論は、康寧祥ひきいる『八十年代』系の姿勢を妥協路線とみなして国家体制の変革を要求し、台湾「民族意識」の興隆を支持する傾向にある。⁽²⁹⁾

「台湾意識」と「中国意識」に関する『生根』における議論は、ほとんど、反中国意識によって貫かれている。それはまさに、『前進』において陳映真が批判していた型の主張そのままのものであった。『生根』と『前進』のこの問題に対する姿勢の相違は、ある程度、「党外」の若い世代における＜民族＞意識の分岐を反映しているものと見られる。

『生根』で展開された「台湾意識」論の一つの型は、現在の台湾社会が一定の社会経済的発展の下で、一つのまとまった単位を形成しており、この共同体に対応した共同意識が既に育ってきている、というものである。この共同意識を「台湾現実意識」と呼ぶ陳樹鴻は、現在の政治体制の不合理の根源が、この意識を否定する所にあり、「台湾現実意識」の肯定こそ台湾の社会と政治の民主化の前提である、と主張した。⁽³⁰⁾ この論は、国民党が構えている、現在の全中国の「中央政府」という枠を取りはずし、台湾社会の上に、その実態を全面的に反映する国家体制を存立させることを要求しているものである。

この「中央」レベルでの政治体制の変革を、陳樹鴻は本省人の政治的権利の拡大という形では提起していない。陳は、「台湾意識」の強調が「省籍矛盾」の拡大に結びつくことを否定する。「台湾現実意識」に基づく政治体制の形成という陳の主張は、「共同体性」を持った台湾を、中国大陆から離れた独立した存在として確立することに重点が置かれている。陳の見解では、「台湾人民」と「中共」との考え方の相違の根本原因は、中国大陆と台湾という二つの社会が、「客観的実体」と意識面でのアイデンティフィケーションとにおいて異なっている点にある。そして、台湾の政治形態をこの「客観的実体」に適合させ、「台湾意識」を強固にすることは、「中共の脅威」に対抗する最も有効な武器とされている。

だが、「台湾意識」は他方で、台湾社会内での本省人－外省人関係にもかかわっている。確かに陳樹鴻は、共同体意識としての「台湾現実意識」を抱いていない大陸籍の人々の存在を、「主観上のアイデンティフィケーション」が「客観上の存在」に後れているためであって、「省籍矛盾」とは無関係である、と主張している。だが、陳の論理の展開から、明言されていない本省人中心の「台湾意識」の側面の存在を見出すこともできる。陳樹鴻が台湾の「客観的実体」の根拠とするものは、社会経済発展上の資本主義化、近代化であるが、陳はその根源を、日本による植民地化の中での資本主義化と、それに伴う全島規模での社会経済生活の形成に見出そうとする。したがって、陳の論理では、本省人は日本統治時代から一貫して「台湾現実意識」の伝統を築きあげてきたことになる。それに対して外省人は、自分達の生活が台湾という「実体」の外にはない現状を認識することによって、次第に「後れた意識」をふり捨て、「台湾意識」を抱くようになる存在と考えられている。即ち、陳樹鴻が言う「共同の立場」、「共同意識」は、その内実においては、本省人の台湾人＜民族＞

アイデンティティに外省人が接近して行くという一方的関係の上に成り立っているのである。

このように陳樹鴻の「台湾意識」論は、「本省人中心主義」を内に孕みながら、努めて対外的「共同性」を強調しようとする、矛盾を持つものであった。そこを突いて、台湾社会内部における意識対立をより重視した見解が、同じく『生根』に掲載された。「意識と存在」と題する葉阿明⁽³¹⁾の文章である。葉は、陳が大陸籍の人々の意識転換における「後れ」の意味を明確に把握しておらず、また、共同体内部の支配被支配関係を看過している、と批判する。葉の観点によれば、「台湾意識」は被支配階級の共通意識であり、それに対する支配階級のイデオロギーが、国民党が既得利益維持のために持ち出す「中華ショーヴィニズム」である。したがって、大陸籍の人々が真の「共同意識」としての「台湾意識」を持つためには、「中華ショーヴィニズム」の桎梏を打ち破る必要があるのだ、と葉は論じる。

葉の論は、意識が客観的存在に照応して機械的に生じてくるのではなく、意識自体における闘争が重要であることを強調しているのだが、同時に、それを台湾社会内部の社会階級の利害との連関で捉えることによって、台湾内の省籍問題を重要視する姿勢をも浮かび上がらせている。

葉阿明は、日本による統治を例に、支配者である在台日本人は本国日本の民族意識を維持し、被支配者である台湾人民との共同意識を作り上げることはなかったと説き、この植民地としての歴史に台湾の「特殊性」があると述べる。その上で、現在、大陸籍の人々が台湾意識を持てないでいる背景にも、この「特殊性」があると示唆する。ここに、葉が、「民族」的支配・被支配関係という図式を現在の台湾にもあてはめていることが、のぞけて見える。

それにもかかわらず、葉の論は一見、社会階級と省籍とを区別しているような装いを見せている。

葉は、外省人の全てを支配階級とは規定せずに、その中の貧困層や軍人、公務員等を被支配階級に属するものと考えている。また、本省籍の人々の中にも支配階級の成員がいるとも言う。しかし、葉の論理では、それぞれの「階級」は、それぞれの「民族」的イデオロギーの担い手でもある。支配階級に属していない大陸籍の人々も、故郷を思う情やイデオロギー教育への服従のためばかりでなく、支配集団から施される恩恵を享受するために、意識の面では「中華意識」を唱え、「台湾意識」に反対する。他方、台湾籍の中の既得利益者も、当然「被支配階級のイデオロギー」たる「台湾意識」を持ちえない。つまり、葉阿明の論では、「階級」は「民族」的出自とは別だとされているが、「民族」意識とは一致している。「階級」的イデオロギーは、同時に「民族」意識となっているのである。このような葉阿明の主張は、本省人を主体とする「台湾民族論」の言うことができよう。

陳樹鴻の論と葉阿明の論からは、「台湾意識」論が、対大陸、対外省人の、論理的に次元の異なる二つの考え方の混合として存在していることがわかる。『生根』の内部で、この二つの考え方が明確に対立しているかどうかはわからないが、「党外」運動における「台湾意識」論は、まだ十分な考察を経た整合性を持った見解としては、確立されていないようである。

民主化の前提条件としての「台湾化」を唱える「台湾意識」論に対する批判としては、そうした主張が「党外」民主運動の複雑化と内部分裂を招くだけだというものがある。『前進』で「台湾民族主義」を批判しつつ積極的に「大中国意識」の意義を展開した江迅は、「台湾結」と「中国結」の争いの根本原因として、「台湾人」と「台湾」との混同と並んで、「民主主義」と「分離主義」との混同を指摘している。江は次のように主張する。「自分達が主人公となる」ための唯一の条件

は「民主主義」である。現在、台湾の「党外」運動が求めている「中央民意代表」の全面改選などの目標も、その前提として「分離主義」を実現しなければならないわけではない。「分離主義」がもたらすものは、国際上・外交上の名義の変更にすぎず、内政の民主化自体には直接関係がない。

江迅はさらに、「自分達が主人公となる」ための必要条件として、対外的な「反帝国主義」を挙げ、その観点から台湾と大陸との結合の必要性を説いている。江によれば、「台湾意識」の究極の目標は、台湾の自主的発展と人民の郷土に対する社会意識の向上にあり、それは台湾自体の客観条件を理性的に評価した場合、真の自主的発展を求めることから引き出される歴史の視野としての「大中国意識」に至るのである。⁽³²⁾

江迅の主張に対して、『生根』は朱三才の「中華帝国主義のペテンを暴露せよ」という批判を掲載した。その中で朱は、「台湾意識」「台湾人意識」が共に歴史、文化、社会経済構造を基礎にした、本省人外省人を問わない概念であることや、台湾人民にとっての民主運動は当然「台湾意識」を伴うものであって、主体抜きの「純民主運動」の提唱は空想的であることなどを論じて、一つ一つ江迅の主張に反駁しているが、その批判の中心は、「反帝国主義」ゆえの「大中国意識」という見解に向けられている。

朱は、台湾の「反帝」と「自主発展」のための物質的基礎として江迅が挙げた、中国の「地大物博」という論拠に対して、次のように反論する。「自主発展」の条件としては、天然資源だけでなく、科学技術、資本蓄積、生産様式、政治制度なども考慮すべきである。自給自足でなく、他国との経済的交流が必要な現在の世界経済体制の下では、「自主発展」と「地大物博」との間には必然的な関係性はない。朱三才はさらに、江の説く、台湾と大陸との歴史的 성격の類似、同文同種、相親しき「記憶と感情の結びつき」などの論点を逐

一批判し、たとえ台湾が「反帝国主義」の立場を取らなければならないとしても、中国と結合する必然性はない、と主張した。⁽³³⁾

ここでは、「第三世界文学」に関する論議と同じ問題が争われている。いずれの場合も、「中国」との結びつきの必然性が論争の焦点となっていないが、討論の前提となる「反帝国主義」の内容の認識もまた、隠れた論争点であった。朱三才の文章の表題にも見られるように、「台湾意識」派の人々は「帝国主義」の具体例として「中国」を念頭に置く一方、先進資本主義国による経済的支配の問題をほとんど意識しない。朱も、開発途上国の経済発展にとって「反帝国主義」が必要であるとは明言していない。だが、江迅や「第三世界文学論」者の主張の前提には、現在の台湾の国際的政治経済関係、とくに日米との関係を基本的には是とするか否かという問題があったのだ。

「中国結」「台湾結」論争より半年ほど前、『生根』の前身である『深耕』の、この問題に対する認識の欠如を指摘した文章が、『深耕』自体に掲載されていた。『深耕』の社論を取りあげて批判した林文菊の二篇の論文である。⁽³⁴⁾

林の最初の文章は、『深耕』の「社論」が、台湾の経済発展が日本に比べて脆弱である原因を国民党政治体制に帰したことに對して書かれた。林は、それが部分的原因にすぎないと指摘し、戦後の台湾は日米両国に対して同時に従属関係にあり、この二重の従属関係を語らずに台湾と日本を比較することはできない、と論じる。ここから林は「党外」に対して、台湾の国際政治経済体系の中での地位の探究と批判が必要であり、その正確な認識によってのみ、台湾のよりよい進路を探し求めることができるのだ、と訴えた。

林の第二篇の文章は、『深耕』の別の「社論」の中の、第三世界の立場と理想は民族主義や「理性」的計算と矛盾するので、台湾は第三世界の立場を脱却すべきである、という主張に対する批判

である。林は、次のように論じる。「第三世界」とは単に生産力の高低で分類しているだけでなく、国際政治経済上の従属関係と歴史的背景も考慮されている。したがって、日米両国に従属している台湾も、「中進国」に分類されることもあるが、やはり第三世界に属するのである。ところが、台湾では多くの人々が、国民党の自己欺瞞の姿勢に影響されて、台湾が第三世界よりも上位にあるという誤った自己意識を抱いている。『深耕』すらもこれと同じ観点であるのでは、「党外」が本当に台湾のために、独立自主の国際的人格を打ち立てることができるであろうか。林文菊は「統一」「独立」の問題に対する態度は語っていないが、その態度決定の基礎となる問題がまだ全面的には検討されていない状況にあることを指摘しているのである。

4. むすび

台湾文学の性格と方向に関する論争と、「中国結」「台湾結」の論争は、台湾における＜民族＞意識の多様性と分岐を暴露しはしたが、その混乱を解きほぐすために相互に冷静な討論を進めていたとは言いがたい。後者の論争は、1984年春に『夏潮論壇』と『生根』との間で再燃しており、「中国意識」と「台湾意識」との問題は今後も様々の分野で論じ続けられて行くであろうが、意義のある論議が行なわれるためには、言論環境の改善と共に、言論規制を含めた歴史的・社会的諸条件によって作られられた＜民族＞意識上の鬱積と屈折に対する自己検討が必要となるだろう。

だが、二つの論争、とくに「中国結」「台湾結」論争においては、単にそれぞれの立場から相手を非難するに留まらず、どのような問題の探究が必要であるかという点が指摘、示唆されてもいる。なかでも、＜民族＞意識の多様性と対立が、台湾の現状に対する認識と前途に対する展望とにおける分岐と密接な関連を持っている状況下では、台

湾経済と先進資本主義国経済との関係、その下での台湾の経済的自立の可能性の有無という問題の指摘は、重要な意味を持ってこよう。この問題はまた、台湾の社会経済体制自体の評価にも関わるであろう。陳樹鴻に見られるような「台湾意識」は、明示的でないが、資本主義社会に対する肯定的姿勢を前提としている。「党外」陣営において、台湾の経済体制に対する態度や運動の社会階級上の基礎が検討され始めている現在、「台湾意識」論はそのような観点からの批判・改造を受けることになると思われる。⁽³⁵⁾

台湾の前途に対する展望、とくに、「台湾」の「中国」全体における位置づけに関する見解とそれに伴う＜民族＞意識は、さらに、中国大陆自体の社会的・文化的改革や対外関係、そして台湾と大陸との間で今後形成されて行く関係などの動向、およびそれらに対する認識によって、大きく左右されるであろう。また、台湾における社会的・政治的發展状況が、＜民族＞意識の分岐の調和ないしは激化にとっての重要な要因であることは言うまでもない。だが、＜民族＞意識に関する言論の混乱状態を解きほぐし、その質の向上を目指すためには、＜民族＞意識自体とそれに関連する諸問題やイデオロギーに対する、思想的次元での分析・探究が必要である。「中国結」「台湾結」論争はその第一歩であった。

最後に、興味深いことに、この論争とほぼ時を同じくして、「少数民族」の知識人自身が台湾における「少数民族」問題について発言し始めたという「事件」が起っている。⁽³⁶⁾こうした動向は、それ自体として当然重要であるが、同時に、漢＜民族＞中心の「中国意識」と、漢＜民族＞系「本省人」中心の「台湾意識」とが共に、「少数民族」の抗議に影響されて、その＜民族＞意識としての質的分析・批判を迫られる可能性の点でも、注目しに値しよう。

註

- (1) 本稿における〈民族〉は, "nation" を意味する「民族」とは区別して使われている。〈民族〉が, 文化的特徴を中心とする集団の諸特徴の, 他の集団との差異の総体の認識に関わる概念であるとすれば, どのような差異をどの程度重視するかによって, その把握は相対的なものとなる。
- (2) Hill Gates "Ethnicity and Social Class," in Emily Martin Ahern and Hill Gates (ed.), The Anthropology of Taiwanese Society, Stanford University Press, 1981, pp.269 - 270.
- (3) 台湾人のいわゆる「歴史情結」である。本特集の若林論文を参照されたい。
- (4) この論戦については, 拙稿「台湾における郷土文学論戦(1977-1978年)」, 『台湾近現代史研究』第3号(1981年1月)を参照されたい。
- (5) 葉石濤「台湾郷土文学史導論」(1977年5月), および, 許南村〔陳映真〕「『郷土文学』の盲点」(同年6月), とともに, 尉天驄編『郷土文学討論集』(台北, 尉天驄発行, 1978年)所収。
- (6) 彭瑞金「八〇年代的台湾写実小説」, 『台湾文芸』第70期(1980年12月), 217頁。
- (7) 詹宏志「兩種文学心靈」, 『書評書目』第93期(1981年1月), 23頁, および, 「台湾文学的方向座談会」における詹の説明, 『台湾文芸』第73期(1981年7月), 191頁-193頁, 203頁。
- (8) この特集には, 「台湾文学的方向座談会」, 壹闡提〔李喬〕「我看『台湾文学』」(日本語訳として, 拙訳「『台湾文学』を考える」, 松永正義ほか訳『終戦の賠償——台湾現代小説選Ⅱ』(研文出版, 1984年)所収, がある)の他, 高天生「在転換的世代裡」と宋沢萊「文学十日談」が含まれている。
- (9) 葉石濤「台湾小説的遠景」, 『文学界』第一集(1982年1月), 葉石濤『文学回憶録』(台北, 遠景出版社, 1983年)所収, および, 彭瑞金「台湾文学應以本土化為首要課題」, 『文学界』第二集(1982年4月)。
- (10) 徐曙整理「陳若曦的文学声音」, 『暖流』第1卷第4期(1982年4月), 48頁。
- (11) 陳映真「中国文学和第三世界文学之比較」, 『文季』第1卷第5期(1984年1月)。
- (12) 禾心訳「論強権, 人民和輕重」, 『大地生活』第1卷第6期(1982年4月), 4-6頁。これはAsian Weekの陳映真へのインタビューの中国語訳に陳映真自身が若干の訂正を加えたものである。
- (13) 夏潮月刊「談民族主義与植民地經濟——訪胡秋原先生」, 前掲『郷土文学討論集』, 562頁。また, 1978年春から秋にかけての『夏潮』には, ほとんど毎号のように, 第三世界に関する記事, 論稿が掲載されている。
- (14) 許水緑「台湾文学界説与方向」, 『生根』第17期(1983年9月25日), 42-43頁。
- (15) 宋冬陽「現階段台湾文学本土化的問題」, 『台湾文芸』第86期(1984年1月), 27-31頁。陳映真, 前掲文, 前掲誌25頁。
- (16) 以上, 葉石濤の見解については, 「台湾郷土文学史導論」, 前掲書73頁, 「為台湾文学找尋座標」, 葉石濤『小説筆記』(台北, 前衛出版社, 1983年)195-196頁, 「台湾小説的遠景」, 前掲書106頁。「論台湾文学應走的方向」, 同上書110頁, による。
- (17) 彭瑞金「台湾文学應以本土化為首要課題」, 前掲誌3頁。
- (18) 壹闡提, 前掲文, 前掲誌208-209頁。
- (19) 陳映真「中国文学和第三世界文学之比較」, 前掲誌, 14-17頁。20頁。
- (20) 宋沢萊「台湾文学論」, 『暖流』第1卷第4期(1982年4月), 64頁。
- (21) 許南村, 前掲文, 前掲書98頁, 陳映真「文学来自社会反映社会」, 同上書66頁。

- (22) 許水緑, 前掲文, 前掲誌43頁。
- (23) 陳映真「向著更寬廣的歷史視野」, 『前進』第12期(1983年6月18日)〔未見〕。ここでの記述は, 『台灣与世界』(ニューヨーク)第4期(1983年9月), 65頁, の抄録によった。
- (24) 蔡義敏「試論陳映真的『中国結』」, 『前進』第13期(1983年6月25日), 16-21頁。
- (25) 江迅「『台灣民族主義』的弔詭」, 『前進』第16期(1983年7月16日)〔未見〕。ここでの記述は, 『台灣与世界』第4期, 74-75頁, の抄録による。
- (26) 梁景峯「我的中国是台灣!」, 『前進』第13期, 23頁。
- (27) 陳元「『中国結』与『台灣結』」, 『前進』第13期, 22-23頁。
- (28) 林正杰「中国人与台灣人是沒有界限的」, 『新生代』, 1983年8月号〔未見〕。引用は, 『台灣与世界』第5期(1983年10月), 64頁, の抄録による。
- (29) 邱垂亮「1983年台灣党外的路線鬭爭」, 『七十年代』, 1983年8月号, 38頁。
- (30) 陳樹鴻「台灣意識——党外民主運動的基石」, 『生根』第12期(1983年7月10日), 17-20頁。
- (31) 葉阿明「意識与存在——再論台灣意識」, 『生根』第15期(1983年8月25日), 27-28頁。
- (32) 江迅, 前掲文, 前掲誌74-75頁。
- (33) 朱三才「揭穿中華帝國主義的騙局」, 『生根』第14期(1983年8月10日), 18-20頁。
- (34) 林文菊「日本能, 我們就是不能」, 『深耕』第26期(1983年1月25日), 5-7頁, 「虛幻意識与外交原則——評『深耕』的对外關係論」, 『深耕』第27期(1983年2月10日), 26-29頁。
- (35) 民主運動を社会階級上の基礎から検討したものとしては, 莫静「台灣民主運動与社会階級」, 『生根』第10期(1983年6月10日), 35-37頁, などがあり, そのような観点からの「台灣意識」批判には, 趙定一「追求『台灣一千八百万人』論」, 『夏潮論壇』第2卷第1期(1984年3月), 14-18頁, がある。
- (36) 「少数民族」の大学生が雑誌『高山青』を創刊して注目を集めた。陳良玉「高山族是我兄弟——訪『高山青』執行編輯伊凡尤幹」, 『暖流』第3卷第1期(1983年7月), 49-51頁。

『中国研究月報』への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は, 中国及びアジア地域に関する論文, 研究ノート, 資料, 書評などで未発表のものに限ります。
3. 原稿の標準枚数は, 400字づつ横書き用紙で論文は50枚, 書評は8枚, その他は30枚とします。
4. 原稿には, 投稿者の所属および連絡先(住所, 電話番号)を付記してください。
5. 採用された原稿は, すべて署名原稿として扱います。
6. 採用された原稿には, 当研究所の規定により薄謝を支払います。
7. 掲載された論文などの抜刷を必要とする場合は, 実費で作成します。
8. 原稿は, 不採用の場合は返却します。
9. 原稿の送付先, 連絡先 ● 102 東京都千代田区飯田橋1-12-12

社団法人 中国研究所編集部 Tel 03-261-8892

本誌の編集方針, 企画等に関しては, 下記編集委員会が審議しています。

1984年度編集委員会 — 委員長: 小島晋治 / 委員: 太田勝洪, 高橋 満, 菱沼 透, 並木頼寿, 村田忠禧, 国谷知史